

ONE'S
voice

野田秀樹 × アイタイヒト



井上道義

指揮者

野田秀樹

モーツァルトで未知の世界を探る

2015年、演出家野田秀樹、指揮者井上道義という二人の鬼才のコラボレーションが遂に実現する。

モーツァルトの歌劇『フィガロの結婚』の新演出上演だ。野田がモーツァルトにどうアプローチするのか？

歌劇では、演出家と指揮者はせめぎ合いつつ協調していく関係にあるが、

野田と井上のコラボレーションのゆくえは？注目が集まる中、公演に向けたワークショップが開かれた

2014年12月、野田と井上が作品やオペラ演出について語り合った。



モーツァルトの喜劇に挑む

— 今回の企画のきっかけは？

井上 僕は「夢の遊眠社」の頃から野田さんの芝居をいくつか観てきて、創意工夫に流れがあって音楽的ところが本当に好きでした。だからずっと片思い状態で、今回やっとくどけたという感じです。

野田 本当はそんなことないんですけどね。何回か話のりかけたときもあったけれど、なかなかうまくいかなかったですね。

井上 僕は野田さんが以前に演出したヴェルディの『マクベス』も観ただけで、野田さんのいいところを出しきっていないと思ったの。基本的に悲劇よりも難しい喜劇をやる人なのだから、ああいう悲劇よりも喜劇の方が合っていると思うし、オペラと演劇の『マクベス』は全く違うというのもあるからね。これで野田さんがもうオペラやるのを嫌になってしまったりしたらもったいないと思っていくつか提案してきたので、今回やっと『フィガロの結婚』と一緒にできることになってとてもハッピーです。でも最初はスケジュールや日本のオペラはせいぜい数回しか上演しないという問題があって、何十回も上演する演劇の世界の人にOKをもらうのに時間がかかった。普段の10倍くらいお金を出せば別だろうけどね。

野田 はじめは普段の10倍くらいお金を出す、もう使い放題みたいなことを言ったんだよね。(笑)最初に制作に取りかかったときは、スケジュール的にこの作品にそんなに時間をかけてやれないんじゃないかと思っていたけど、やはり作品の奥深さなのか、やり出したら僕にとって面白いんですよ。それで本

来なら新作創作にあてる時間まで『フィガロの結婚』にかけちゃった。でもいつも新しい世界に踏み込んで、自分が面白いと思ってのめり込んだときはやっぱり成果としても面白いことが多いから、面白いものができるに違いないと信じてやっています。

オペラならではの難しさ

— 普段演劇の世界にいる野田さんがオペラを演出するとき、どういった違いやチャレンジがありますか？

井上 僕はオペラの演出は本当に演出家として一流の人がやるべきだとも思っているけれど、日本人の場合、やっぱり言葉の壁が非常に厚い。野田さんにとっての大冒険も、ひとつはイタリア語だね。イタリア語がよくわからないとイタリアのオペラを演出できるわけがない。この単語が動詞なのか形容詞なのか、現在形なのか過去形なのか、などということで物事が変わってしまうわけだから。そこを簡単に越えられると思う人は軽薄なんです。やっぱり簡単にはできないはずなんです。今回はそういうところまで詰めてほしいと思うし、そのためにサポートするスタッフを僕たちでちゃんと用意しないとイケない。

野田 それはね、結構自分でやってる。今回は字幕を自分でつくろうとしていて、だから字幕もちゃんと見てほしいんだけど、何のために字幕をつくるかと言うと、原語では何を言おうとしているのか、日本語訳は全然違う表現になっているときがあるので、元がどうかを理解するためでもあるんだよね。

井上 やってるんだ！大変だよ！

野田 だからものすごく時間が掛ってますね。(苦笑)でもやっぱりそこを演出家がかかっていないと。おそらく『マクベス』のときはそこがわかっていなかったと思う。音楽に乗って流れで場面の雰囲気をつくっていたけれど、やはり言葉をちゃんと解釈することによって、役者の位置が変わるとか、こういう並びでなくちゃおかしいはずだということが出てくる。演劇の演出のときは普通にできることをやれないでいたけれど、今回はそれがないように、全部言葉を把握しながらやっている。だからワークショップがすごく大事だと思うの

は、僕が思い違いをしていると、一般的な解釈がどうなのかを教えてもらえたりすること。そこはすごく助けてもらっていますね。

井上 僕は野田さんが自分で原語にあたっていているということが本当に嬉しいです。

野田 演劇とオペラをつくるときの大きな違いは、演劇のときは自分の台本だし、台本を持って稽古するということはあまりないのだけど、オペラの場合はそのまま通していると歌手がどんどん歌っていて、油断すると前見て歌い続けることになってしまうんですよ。だから(演出家は)何もしないことも本当はできるわけじゃないですか。そこがやっぱり全くとお芝居と違うところで、だからこそとても面白い作業でもある。

井上 そこが大変なんだよ。大変な世界に飛び込んでしまったねえ、すごいエネルギー。偉い！

野田 飛び込んだじゃんたんですね。(笑)

井上 大変だけど、身体に気をつけてください。(笑)

あらゆる恋愛感情があらわれる

— 『フィガロの結婚』の面白さはどこにありますか？

野田 今ものすごく関心が出てきたのは、作品の中にある男と女のありとあらゆる恋愛事情の中で、きっとモーツァルトならではの面白さなんだろうけど、言っている言葉とは裏腹な音が出ているんですよ？

井上 そうそう！

野田 それをどう見せるか。解釈とまではいかない、ほんのちょっとしたことですけどね。



ONE'S voice

野田秀樹 × アイタイヒト

井上 それを音楽にできるのは、天才音楽家だけ。ショスタコーヴィチやモーツァルト、ハイドンもそうだけど、本当に天才だから書ける。みんなどうしても一面的になるんだよね。

野田 演劇で言葉を扱うときの面白さもそこにあって、いい戯曲は、セリフの中で裏がある言葉を探すのがとても面白い。ダメな戯曲は表(の意味)しか書いていないけど。今回は、いい戯曲の裏に書かれていることを音として探している。逐一日本語に訳して言葉を探りながらね。例えば、「許す」ということがいっぱい出てくるけど、本当に許しているのだろうか。現実には我々は許すと言って何年も根に持って生きていたりするわけだから、そういう部分をちょっと見せたいなと思っています。それにしても『フィガロの結婚』という作品は読めばよむほど、男と女の恋愛におけるあらゆる感情が網羅されていると思うんですよ。例えば、バルバリーナという若い女の子の登場人物が伯爵のことをみんなの前で罵る場面があるじゃない、「あなた私にキスしようとしたとき…」というくだりが。あの瞬間というのは、伯爵のように地位のある男性が最も嫌うことだと思うんだよね。社長が、新人OLに、全社員がいる前で「あなたはこうしてこうした」と言われるようなものだから。で

もその場で怒れないわけ。(笑)

井上 (笑)

野田 それでどうやって伯爵がバルバリーナに「男ってのは怖いよ」ということを知らしめてやるかというのは一つ考えているんですよ。**井上** ブラボ、ブラーボ！それ聞いただけで観に行きたくなるよ。

野田 そういうことがいっぱいありますよ、拾うと。

井上 そんなの俺には思いつかない！

何もないままにものを見る

— 過去にたくさんの上演例がある古典で新しい作品をつくるということはどう捉えていますか？

井上 インターネットで検索すると、たくさん例が出てくるでしょう？『フィガロの結婚』にしても、こういう演出、ああいう演出、簡単にパッパパッ見られて知識は得られるんだけど、だからこそ大変なんです。やっぱり新しいものをつくるっていうか、野田さんにしかできないものをつくるってことは、すごく大変。それができる演出家はとても少ない。

野田 「新しい」というキーワードで言うと、僕なんか若い時から自分の台本で芝居してきたので「新しい」ことをしていると言えるんだけど、今までずっと新しいものをつくるという意識でつくってきたわけではないんですよ。

井上 自分として今つくりたいものをつくってきたということ？

野田 そう。

井上 それがお客さんにとっては新しいと思

えるわけだ。その「自分として」って言うときの「自分」が、人のものの借りものである人が多いんだよね。

野田 ときに自分で作品をつくっていると、それが今まで誰もやったことのない形になって新しいこともあるし、実は誰々がすでにやってきたよということもある。(笑)でも自分が初めてのつもりでやって、それはもう誰かがやっていると言われても、へっちゃらなんだよね。知らなかったんだからしょうがない。

井上 知らなくていいことを僕たちは知りすぎる。録音も録画もなかった時代に、ミラノのスカラ座の総裁が、プッチーニやヴェルディの作品を上演すると、批評家や天井桟敷の連中が「昔こうやった、ああやった、あいつがこう歌った」ってことを持ち出してきて大変だと嘆いていたけど、今はどこでも同じ。過去にああやったこうやったとインターネットですぐにわかっちゃうから。

野田 そういうところはちょっと歌舞伎の世界に似ているよね。以前、中村勘三郎と一緒に新しい歌舞伎と言われるようなものを作ったときに、「これは今度僕らが死んだ時、これが型になっちゃって、十八代目勘三郎はこうでこうやって足を上げたんだよとか言っちゃうんだよね。僕らはただふざけてやっているだけなのに」などと言って笑っていたんだけど、井上さんが指摘したようなことはたくさんあると思うんですよ。なんか急に、「あそこは絶対に足を上げなくちゃいけないんだよ」となってしまう。そこがものを面白くなくしてしまう一番の原因じゃないかと思う。まず普通にそこにあるものを普通に感じて面白い面白くない、でいいんじゃないかな。まあ、それは演劇でも本当に難しいんだけど。何もないままにものを見たりつくりたりした時がとても面白い。そう言う意味でも、今回僕はかなり未知の世界をやっているんで面白いし、だから仮にどうなっても楽しんだんですよ。全部井上さんのせいでできるから。(笑)

井上 いいなあ、未知の世界か。そう、確かにオペラは、究極的には音楽なんだよ。そうでないといけない。オペラは演出だという意見は大いに間違っていると思う。巷には作品の読み換えをした演出があふれているけれど、やっぱり音楽にはその音楽がつくられた時代



のスタイルというか響きや匂いがあるんだよ。例えばマーチがあったら、それが厚い皮の靴音なのか、それとも平民の裸足に近い足音なのかで、もう全然音楽が違ってくる。それを読み換えてしまったらどうにもならないんだよ。そうやって何か人がやったことのないものに無理やりしていくということは嫌だね。

野田 井上さんに言われたのは初めてだけど、そこは自分がやっているときにいつも思いますね。演出家というのは何かを思いついてやってみるんだけど、今回のようなワーク

ショップの段階でも、これは完璧に音楽をじゃましているのかな、自分が考えついた意図と合っているはずなのに違うのかな、直感的に感じるころはいくつもありました。やめることは簡単なので、そういうときは退却ですね。

共同作業へ向けたお互いへの期待

— 最後に、お互いへの期待をうかがえますか？

野田 期待なんて、恐れ多いですよ。責任を押しつけているわけじゃなくて、やっぱりオペラ

は井上さんが生きてきた場所ですから、そこに僕が行って楽しめるということがすごくいい。どんな結果になっても僕の中では非常にありがたい体験なのでとても感謝しています。

井上 僕はちょっと死にかけたんで、死なずにこの作品ができることの運命を感じます。野田さんが今より20年若くても年老いていてもうまくいかなかったらどうし、今この時にしかできないことだと思っています。

対談を終えて

今回の『フィガロの結婚』は全国9つの公共ホールと6つのオーケストラが参加し、10か所で13公演を行う共同制作プロジェクトである。ホールの財政事情が厳しい中、特に地方では自主事業で大規模なオペラを制作することは難しかったが、費用や役割を分担して共同で制作することによってそれが実現する。対談の中で公共ホールのあり方について触れたとき、野田と井上はともに、形式的に適用されるルールの多さがクリエ

イティビティにも影響しかねない現状を指摘し、「劇場は管理する場所であってはならない」ということを強調した。今回のプロジェクトが、制作する公共ホールや参加する表現者たち、そして観客、さらにはこれまで劇場に足を運ぶ機会がなかったという人々にとっても、ホールが「管理する場所」ではなく、自由な精神に満ちた「ワクワク感を発信する場所」であることを強く確信する機会となるよう期待したい。

取材・構成：潮 博恵
写真：Hikaru.☆

今回のアイタイヒト

井上道義 INOUE MICHYOSHI

いのうえ みちよし 指揮者。1946年東京生まれ。朝明学園大学卒業。ニュージーランド国立首席客演指揮者、新日本フィル音楽監督、京都市響音楽監督兼常任指揮者を経て、2007年、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督、ならびに石川県立音楽堂アーティストック・アドバイザーに就任。同年、「ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト」を自ら開催し、音楽・企画の両面で大きな成功を収めた。2010年「京都市文化功労者」を受賞。ラ・フォル・ジュルネ金沢を含む多くの実験的企画を敢行し続けている。2014年4月より、大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者に就任。

野田秀樹 NODA HIDEKI

のだ ひでき 劇作家・演出家・役者。1955年長崎県生まれ。東京大学在学中に「劇団 夢の遊園地」を結成、一大ブームを巻き起こし92年に解散。ロンドン留学を経て93年、NODA-MAP設立。『キル』『パンドラの鐘』『オイル』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『南へ』『エッグ』『MIWA』など次々と話題作を発表。故 中村勘三郎と組んで歌舞伎『野田版 研辰の討たれ』『野田版 鼠小僧』『野田版 愛陀姫』の脚本・演出を手掛けるほか、海外の演劇人と積極的に作品を創作するなど、演劇界の旗手として国内外を問わず、精力的な活動を展開。2015年2月～4月、東京、パリ、大阪、北九州で『エッグ』を上演。09年より東京芸術劇場芸術監督に就任。多摩美術大学教授。

モーツァルト/歌劇『フィガロの結婚』～庭師は見た!～ 新演出
(全4幕・字幕付 原語&一部日本語上演)

10月24日(土)・25日(日) 14:00開演 コンサートホール

指揮・総監督：井上道義 演出：野田秀樹
詳細はP7及び劇場HPにて／東京芸術劇場▶www.geigeki.jp/

チケット発売
4月28日(火)
一般発売

| | |
|--------------------------------------------|------------------------------------------------------------|
| 全 国 10 都 市 上 演 予 定 | 5月26日(火) 金沢歌劇座 / 6月6日(土)～7日(日) 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール |
| | 6月10日(水) サンポートホール高松 / 6月17日(水) ミューザ川崎シンフォニーホール |
| | 10月29日(木) 山形テルサ / 11月1日(日) 名取市文化会館 大ホール |
| | 11月8日(日) メディキット県民文化センター(宮崎県立芸術劇場) / 11月14日(土) 熊本県立劇場 演劇ホール |
| ※関連公演：5月30日(土)～31日(日) 大阪フェスティバルホール | |

主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
共同制作：(公財)金沢芸術創造財団/兵庫県立芸術文化センター/(公財)高松市文化芸術財団/ミューザ川崎シンフォニーホール(財)川崎市文化財団グループ/
東京芸術劇場(公財)東京都歴史文化財団/(一財)山形市都市振興公社/(公財)名取市文化振興財団/(公財)宮崎県立芸術劇場/(公財)熊本県立劇場/
(公財)石川県音楽振興財団(オーケストラ・アンサンブル金沢)/(公財)東京交響楽団/(公財)読売日本交響楽団/(公社)山形交響楽協会/(公財)九州交響楽団